3 学校における伝統音楽とアウトリーチ・ワークショップ

学校では，日本ならびに世界各地の伝統音楽のアウトリーチやワークショップが取り入れられ，伝統音楽の指導に重要な役割を担っています。

1 伝統音楽の実技指導とワークショップ

学校への音楽のアウトリーチはその目的・内容により，大きく鑑賞と実技指導にわけられます。さらに，伝統音楽の実技指導のワークショップには，実演家ー子どもー教師の関わり方により次のような種類があります。

①実演家が学校の教師に実技を教える
②学校の教師が実演家に子どもへの指導の方法を教える
③実演家が直接子どもを教える

学校における伝統音楽の鑑賞ならびに実技指導では，「学習のねらい」に沿ってこれらのワークショップをうまく組み合わせる必要があります。

2 ワークショップを生かした実践

全日本音楽教育研究大会（東京大会，2019）の小学校の研究授業では，子どもたちが代替楽器でバリ島のガムランを演奏しそれが鑑賞の深まりにつながっていました。この実践にあたっては，音楽科の教諭が事前にガムランのワークショップに参加し，指導計画ならびに指導方法についてガムランの専門家と協議を重ね，その上で専門家を学校に招いて子どもへのワークショップを実施したというプロセスがありました。

日本音楽と音楽教育の研究者，学校の教師，実演家による「日本音楽の教育と研究をつなぐ会」では，実演家の専門的な力を学校に生かすための方法について行政と一体となって検討してきました。その結果，上記の3種類のワークショップを組み合わせた実践により学校における日本音楽の指導に新たな展開をもたらしました[1)]。

たとえば箏の表現力を小学生に体験させる授業では，まずは音楽科教諭が箏の基本的な奏法をワークショップで学び，次に箏の若手実演家たちに向けて子ども理解のためのワークショップを行いました。その上で実演家を授業に招き直接子どもを指導してもらいました。このプロセスを経ることで，「息づかい」をキーワードにした指導が生まれ，実演家の指導で音がまったく変わることを，子どもたちに伝えることができました。

3 アウトリーチを生かすために

実演家と教師の協働のすすめ

実演家によるアウトリーチ（鑑賞・実技指導）を学校教育に生かすためには，実演家と教師が協働しながら授業を企画運営実施することが大切です。協働により，アウトリーチ活動を軸として実演家・教師・子どもの間での学びあいが生まれそれぞれにとっての新しい学びにつながります。

派遣制度や地域の組織を生かす

伝統音楽の実演家の学校へのアウトリーチには，国や地方自治体民間団体による実演家の派遣制度や実演家のリストを活用することができます[2)]。また地域の公共ホールの活動とリンクさせることも今後の展開として大切になります。

1) 文化庁「伝統音楽普及促進支援事業」（2015年～2017年）の研究成果が『唱歌で学ぶ日本音楽（DVD2枚付き）』（音楽之友社 2019年）に収められている。
2) 文化庁「文化芸術による子供育成総合事業」https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shinshin/kodomo/ における「巡回公演事業」「芸術家の派遣事業」「邦楽実演家団体連絡会議加盟団体」（日本三曲協会によるインフォメーション）https://www.sankyoku.jp/hougaku.php における各団体の情報など。

（加藤富美子）